



地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義：0歳児のパパママセミナー受講者の自由記述を手がかりとして

伊藤, 篤
川谷, 和子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):125-131

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006274>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006274>



地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義 －0歳児のパパママセミナー受講者の自由記述を手がかりとして－

Meanings of Parenting Sessions for Fathers and Mothers Raising Infants under the Age of One Year; through open-ended description by the participants

伊藤篤* 川谷和子**

Atsushi ITO* Kazuko KAWATANI**

要約：子どもの誕生直後から自信を持って育児を開始できる親は決して多いとは言えない。一般に出生から3～4か月間は、乳児の睡眠リズムは未確立であり、頻繁な授乳と排泄処理に追われる生活が続く。こうした生命維持を中心とした養育活動が優勢な時期には、余裕をもって子どもに接することはなかなか難しい。しかし、生後5か月を過ぎるころから昼夜の区別が明確になり睡眠リズムも確立するため、養育者はそれ以前に比べて余裕をもって子どもに接することができ、その成長・発達の様子に目が行くようになる。こうなると、「どのように接することがわが子の順調な成長・発達につながるのか」が養育者の関心を占めるようになる。そこで、この時期をはじめとした育児家庭対象の長期講座（月1回・8か月間・計7回）には一定の意義があると考えた筆者らは、2005年から神戸大学大学院総合人間科学研究科（当時）が地域貢献のひとつとして運営を開始し、2007年度より「地域子育て支援拠点（ひろば型）」として国事業を提供している大学サテライトにおいて、「0歳児のパパママセミナー」を構想・実施した。本報告では、2009年度・2010年度・2011年度の講座参加者を対象に実施した調査（自由記述）結果を整理・分析することを通して、育児早期から開始する長期にわたる親講座の意義を検討した。

1. 親講座実践の背景

はじめに、本報告のもととなる親講座が実施された大学サテライト（地域子育て支援拠点）の沿革や現状と、なぜこうした親講座が地域子育て支援拠点でおこなわれるのか・なぜこうした親講座が必要とされるのかなど、親講座実践の背景を述べておく。

(1) 大学サテライト（地域子育て支援拠点）

本報告で扱う親講座が実施された場合は、神戸大学大学院総合人間科学研究科（当時、現在は人間発達環境学研究科）が2005年9月から運営している研究科のサテライト施設である。この施設は、灘区役所旧庁舎2階部分約350㎡を改装した地域住民の居場所であり、「子育てを契機とした共生のまちづくりの拠点」を目指して多様なプロジェクトがおこなわれているとともに、研究科の教育・研究・社会貢献の場としても機能している。国が新たに制度化した「地域子育て支援拠点事業（ひろば型）」を担う運営主体としてこの大学サテライトが補助金交付の対象となったのが2007年度からであり、それ以降現在まで、このサテライトはこの地域子育て支援拠点事業を担ってきている。

開館時刻10:30・閉館時刻17:00であり、火曜日から土曜日までの週5日間の開館（日曜日・月曜日は閉館）である。また、

夏季および冬季にも休館（約10日間ずつ）するので、年間開館日数は約240日となる。利用者の大多数は、灘区内に居住する3歳未満の親子とその親（親子会員としての利用登録家庭の85%以上）である。利用者数は、人気の高いプログラムのある日とない日・長期休館の前後・近隣でのイベントの有無などによって異なるが、最近では、年間総利用者数は延べ3万人近くとなっている（1日平均100人・50組を超える）。

(2) 地域子育て支援拠点の基本4事業

地域子育て支援拠点事業には3つの類型、すなわち「センター型」「ひろば型」「児童館型」がある（2013年度からは「一般型」「連携型」「地域機能強化型」という類型に移行中）。この事業は、子育て中の親子が気軽に集い相互交流を楽しんだり、子育ての不安・悩みを相談を通して解消・低減させたりすることができる居場所の提供を目的としているが、この背景には、地域あるいはコミュニティを単位とする社会による子育て支援の創出、すなわち子育ての社会化が必要であるという理念が存在する。

いずれにせよ、上記の3類型いずれにおいても、拠点として実施すべき（補助金交付の条件としての）取組、いわゆる基本4事業が決められている。それらは、①子育て親子の交流の場の提供

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

** 関西保育福祉専門学校保育科・専任講師

（2013年10月1日 受付）
（2013年11月1日 受理）

と交流の促進、②子育て等に関する相談・援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施である（兵庫県ホームページ）。これら基本4事業のうちの④に見られるように、拠点では、主に親を対象とした育児に関するセミナー（講演会、講習会、勉強会、テーマのある交流会など）、あるいは、主に支援者を対象とした支援のあり方に関するセミナー（講演会、講習会、勉強会、テーマのある意見交換会、相談ケースに関する検討会など）を、1月に1回は実施しなくてはならないとされている。これが、大学サテライトにおいて親講座を実施している理由のひとつである。

（3）親講座の必要性

大学サテライトでは、地域子育て支援拠点（ひろば型）の補助金交付条件（基本4事業）のひとつである親を対象にした育児に関する講座を実施するという「義務」としての消極的な理由からだけでなく、以下に述べるような積極的な理由から親講座を構想・実践している。

1950年代から1970年代にかけて、地方から東京・名古屋・大阪を中心とする三大都市圏への急激な人口移動（70年代はペースが緩やかになるが）が生じ、2005年には三大都市圏の人口がその他の地方の人口を上回った（縄田 2008）。三大都市圏に移動してきた家族は、地方におけるしがらみの多い生活から解放され、都市におけるプライバシー重視の生活を享受する一方で、地縁を結ぶことには消極的になっていった（山崎 2012）と考えられる。こうした背景のもと、かつての地域共同体において見られた、新しく親となる者や育ちゆく子どもに対して年長者が「自ら示し、教え、諭す」といった日常生活に組み込まれていた「親が親として地域のソーシャルサポートを得ながら成長していく機会」が減ってきたと言える。また、1家庭当たりの出生児数の減少（国立社会保障・人口問題研究所 2011：1940年の完結出生児数は4.27人、2010年の完結出生児数は1.96人）に伴う年齢の離れた弟妹の減少により、「親になる世代が成長の過程で乳幼児にふれる機会」をほとんど得ていなくなって久しいという現状もある。

こうした課題状況を踏まえるならば、地域あるいはコミュニティを単位とした社会による子育て支援の創出を目指した施策のひとつである地域子育て支援拠点事業において、育児初期に注目し、「親としてのあり方や親としての発達を支援する」ための親講座を開催することに一定の意義があると考えられる。

2. 大学サテライトにおける親講座の目的と概要

（1）親講座の目的

本稿で扱う親講座を筆者らは「0歳児のパパママセミナー」と名づけたが、この名称の中に本講座のねらいが含まれている。まず、「0歳児」を育てている家庭を対象にすること、できる限り早期からの支援を大学サテライトが重視していることの表れである。人により、子育てという日々繰り返される営みによって感じるストレスの質や強度は異なるものの、調査（例えば、原田 2006）によって明らかにされた育児不安感などをベースとするストレスは、時間の経緯に伴って蓄積していき、ストレス状態やストレス症状に結びつきやすくなるため、こうした不安・心配・焦りなどへの何らかの介入や支援の提供は、出産後早期であ

ればあるほど効果をもつと予想される。ただし、早期とは言っても生後直後は、身体的に首がまだすわっていない時期、あるいは感染症にかかりやすい時期であるため、子どもを連れて外出することは難しく、子どもをどこかに預けてセミナーに参加することも容易ではない。また、本稿の要約の中で述べたように、親として子どもにどう対応するかに関心を持てるような精神的余裕ができる時期を待たなくては、セミナーそのものの効果も望めない。以上のような観点から、生後5か月を開始時期とし、子どもを同伴して参加する講座を構想した。

次に「パパママ」を入れているのは、男女共同参画社会の実現を背景にし、近年になって重視され施策化（例えば、内閣府 2011：日本版ババオータ、イクメンプロジェクトなど）されている男性（父親）の育児へのコミットメント促進を意識したからである。

いずれにせよ、子どもが0歳児という早期から、月齢に応じた乳児の発育・発達に関する理解を深めるとともに、乳児への対応の方法や技能を高めることを通して、子どもに一義的責任を持つ親としての自覚や自信を夫婦（男女）共に高めることを目標とした親講座を大学サテライトの中核事業と位置づけた。

（2）親講座の内容

<受講家庭の募集手続>

大学サテライトの運営はその発足の経緯からして神戸市との連携プロジェクトであるため、受講家庭の募集にあたっては灘区保健福祉部（当時の組織名）の協力を得た。すなわち、毎年3月末に保健福祉部が灘区内の前年12月生まれの子どものいる家庭に4か月健康診査の案内状を郵送する封筒に、この「0歳児のパパママセミナー」のチラシと申込書を同封してもらうという手続きをとった。チラシには、セミナー期間が5月から12月までであること、8月を除く毎月第2土曜の午前中にセミナーを7セッション開催すること、極力夫婦で参加すること、0歳児同伴が望ましいこと、セミナー時間内に小・中・高校生とのふれあい体験が組まれていることが、セミナー7セッション分の予定表（日付・時間帯・テーマを含む）とともに記載されていた。希望者は、4月末日までにファックスで大学サテライトに直接申し込む形式をとった。

<セミナーの概要>

次ページの表1は、セミナー7回分のテーマとその概要（本報告で扱う2009年度・2010年度・2011年度に共通）である。各回のテーマは、乳児の月齢（12月生まれなので、開催月が子どもの月齢に対応する）に応じた発育・発達を踏まえて決定した。各回の内容は親が子どもの発育・発達の変化に応じて知っておく知識・対応方法が中心であるが、テーマに応じて自分なりに子どもへの対応のあり方を考えることも含めた構成に心がけた。

すでに述べたように、このセミナーは、いずれの年度も、5月～12月まで（8月を除く）の第2土曜日10：30～12：00まで大学サテライト内の1室（多目的室）で実施された。室内には、フロアマット・バスタオル・玩具を用意した。親子は一緒に入室し、親は靴を脱いで座り、かたわらで乳児を寝かせてセミナーを受講する形式を取った。筆者のうち一人（臨床発達心理士）が一貫して講師を務めた。

なお、このセミナーは、同じ大学サテライトの次世代育成プログラム「小・中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習」と連動したプログラムであり、10:30～11:10の40分間にセミナー（親講座）が、11:15～11:45の30分間にふれあい体験学習（親子はふれあいに協力）が、11:45～12:00の15分間にまとめ・質疑応答・アンケートへの記入がおこなわれた。

表1「0歳児のパパママセミナー」各回のテーマおよび概要

回 (開催月)	テーマ 概 要
1回 (5月)	赤ちゃんの生活空間の広がりとし身の発達 生活リズムの大切さ、毎日のあやしかけ・言葉かけの大切さ、子どもの育ちを他者と比較せず、各自のペースでとらえようとする姿勢の大切さを知る。
2回 (6月)	視界の広がり／うつぶせになって遊ぶ うつぶせになって遊ぶことで視界が広がり意思が強くなること、腹軸運動からハイハイに移行していく時期のさまざまなふれあい遊びの方法を知る。
3回 (7月)	人見知り／睡眠と夜泣き 人見知り・新しい場所の意味を理解し、適応を急がないことの大切さ、赤ちゃん大人の睡眠のメカニズムの違いを理解し夜泣きを長引かせない方法を知る。
4回 (9月)	後追い／目の前のこと・向こう側のこと 後追いの意味を理解し、それへの適切な対応方法を知る。目の前のことと向こう側のことに関する認識の発達（対象物の永続性）を理解する。
5回 (10月)	赤ちゃんの好奇心と探究心 行動範囲の広がり好奇心に対し、見守りと制限の範囲・その対応を知る。三項関係の成立と人への関わりとの関連を理解し、家事・仕事とのバランスを考える。
6回 (11月)	遊びの広がり安全への配慮 乳児の目線からの安全確認、危険を取り除く環境整備、探索行動の大切さを知る。成長の個人差とそのペース（個々の育ち）を見守ることの大切さを知る。
7回 (12月)	幼児期の生活に向けて 子どもの行動は、時には親には不都合なこともあるが、それらを問題行動ではなく、重要な成長過程としてとらえた上で、幼児期に向けた子どもの生活を考える。

<受講家庭数>

夫婦が0歳児を同伴して参加することが前提であるが、7回ともすべて母親と子どもだけの家庭、回によって両親と子どもの参加と母親と子どもの参加が見られる家庭が混在した。また、父親が単独で子どもだけと参加する家庭は皆無であった。5月当初の申込家庭数は、2009年度が21組、2010年度が24組、2011年度が23組であった。年度途中で転居等により不参加となった家庭を除くと、3つの年度における受講家庭の平均組数は21、1回あたりの平均出席組数は17であった。

3. 受講家庭による親講座に対する評価

本報告の主な目的は、大学サテライトが提供する早期の育児家庭を対象とした親講座の意義を総合的に検討することである。そこで、受講家庭が最終の第7回セミナー終了後に記入したアンケート（自由記述）結果を整理・分析することとした。1回ごと

にもアンケートを実施しているが、これは各回の内容に対する評価に特化した質問内容になっており、講座全体の意義を検討する資料とはなりにくいため、本報告では利用しなかった。

(1) アンケートの実施手続・質問内容

8か月間・7回にわたるセミナーの受講が終了した時点で、参加家庭の母親と父親にこの親講座に対する評価を依頼した。具体的には、約8か月間の受講経験を振り返り、以下の3つの質問に対し、率直な感想・意見などを自由に記述するよう求めた。

- ①セミナーを受けて印象に残っていること
- ②子育てや家庭生活において変化したこと
- ③子育てに関して後輩パパ・後輩ママに伝えたいこと

以上の質問を記した用紙を、最終回の参加者全員に配布し、セミナーを実施した多目的室内で記入を求めた。講座終了後に実施したため十分な時間を取ることは難しく（所要時間は5分～10分程度）、3つの質問すべてに回答が書かれた用紙は少なかった。

(2) アンケートの回収状況

回収数は、2009年度が15組（回収率約70% 内訳：母親のみ記入12件、夫婦ともに記入3組6件、計18件）、2010年度が15組（回収率約62% 内訳：母親のみ記入10件、夫婦ともに記入5組10件、計20件）、2011年度が17組（回収率約73%、内訳：母親のみ記入15件、夫婦ともに記入2組4件、計19件）であった。3年間の総回収数は57件となった。

(3) アンケートの結果と考察

3つの質問に沿って、記述内容を男女別に並べたものを以下に示すとともに、質問ごとに順次考察を加える。記述内容のうち、セミナー主催者や講師に対するお礼の言葉、ふれあい体験学習でふれあった青少年のことなど、本報告の目的と直接関連のないものは、分析対象から外した。なお、示した記述結果は、原文の意味・本質を損なわない程度に筆者らが最低限の修正を施している。

①セミナーを受けて印象に残っていること

◆父親の記述

- ①-1 成長に応じた内容であったため、子育ての幅が広がり、参加するたびに新しい発見があった。
- ①-2 セミナーの話を思い出し、安心してゆとりを持って子どもの様子を見るようになった。
- ①-3 子どもと遊ぶのはおもちゃを介してではなく、スキンシップが大事であること、一緒に遊ぶことの大切さ。
- ①-4 子どもとの接し方が具体的に分かった。
- ①-5 子どもの成長や変化により関心をもつようになったし、それを楽しめるようになった。
- ①-6 研究に基づいた子育ての話が聞けて良かった。

◆母親の記述

- ①-7 実践的な話が聞けたので、見通しが持てて心に余裕ができ、困りごとが減った。
- ①-8 赤ちゃんの行動の意味を教えてもらい、怒る必要がないとわかって気が楽になった。
- ①-9 大人が考えている以上に、子どもは感じているし、理解できている。
- ①-10 話を聞いていなければ、そのまま見過ごして、小さな変化に気づけなかったと思う。

- ①-11 子どもに向き合うことの大切さを夫と共に考えることができた。
- ①-12 子どもの自主性や自尊心を損なわないよう、親は温かく見守ることが大切だと思う。
- ①-13 周りの子の様子にあせらず、マイペースで良い。成長を気長に見ていけたらよいと思う。
- ①-14 子どもの成長はそれぞれ違う。月齢でこうしなければと考えなくても良いと思った。

◆考察

この質問は、親講座全体の「印象」を尋ねたものであるため、多岐にわたる内容が示されている。したがって、共通項を取り出すことは困難であるが、あえていくつかの観点を導き出してみたい。

まず、講座を通して得た「子どもの成長や変化に対する関心・認識・気づき」がポジティブな結果に結びついていることを示す記述がいくつかある（①-1、①-5、①-10、①-13、①-14）。①-1では、成長に応じた視点を得ることによって子育ての幅の拡がりや新たな発見を実感している。①-5では、成長・変化への関心がそれを楽しむという姿勢に変化している。また、①-10では、小さな変化を見逃さないことが気づきをもたらすことを実感している。さらに、①-13と①-14では、成長のペースについて、それを焦らず見守る態度への変容が示されている。

次に、講座の内容を聴き「育児に対して安心・ゆとり、あるいは見通し・余裕を持てたこと」がポジティブな結果に結びついていると判断できる記述がある（①-2、①-7）。①-2では、安心・ゆとりが子どもの様子への関心・見守りへとつながり、①-7では、見通しが持てたことによる余裕から困りごとの減少がもたされている。

3つ目の観点は、「乳児の理解」の深まりと、それがポジティブな結果をもたらしたことを示す記述である。前者は①-3、①-9であり、講座を通して、「おもちゃではなく他者との相互作用が子どもの遊びの本質であること」「子どもが予想以上に多くのことを感じ・考え・分かっていること」の理解が促進されている。後者は①-8、①-12であり、講座を通して得た「行動の意味を知ること」によって怒りの感情を抑制できることにつながることで、「子どもの自主性・自尊心の大切さを知ること」によって温かく見守る態度が醸成されている。

①-11の記述は、ここではたった1つではあるが、男女共同参画の促進を示す内容になっており、この「夫と共に考える」姿勢への変容は、本講座のねらいが反映された回答である。残りの2つの記述は「子どもとの接し方の指針となる（①-4）」「研究にもとづく話が良い（①-6）」といった抽象度の高い回答であった。

なお、性差については取り上げるべき特徴は少ないが、記述された内容を比較すると、母親のほうが父親よりもその内容が具体的である。この結果は、わが国では女性のほうが育児に関する当事者性が高いことを反映していると考えられる。

②子育てや家庭生活において変化したこと

◆父親の記述

- ②-1 何にでも手を出していたが、子どもの様子を見守るようになった。

- ②-2 子どもの行動にはすべて意味があるので、楽しみながら見守れるようになった。
- ②-3 子育てが「大変」というイメージから子育ては「楽しい」に変わった。
- ②-4 子育て情報が得られることで余裕ができた。
- ②-5 自分ではなく、子どもを第一に考えて生活するようになった。子どもとふれあう頻度が増えた。
- ②-6 セミナーに積極的に参加するよう心掛けている。
- ②-7 妻が子育てでしんどくないか、仕事中でも気にかけるようになった。
- ②-8 妻が意外と積極的にママ友と交流できている。
- ②-9 子育てを楽しんで夫婦仲良くなっている。

◆母親の記述

- ②-10 子育てをより楽しめるようになった。
- ②-11 安心して子育てができるようになった。
- ②-12 不安に思うことが少なくなった。
- ②-13 情報に振り回されることなく、焦りもなくなった。余裕を持って接することができた。
- ②-14 今まで知らない遊び方や接し方を聞いて、それらを実行するようになりスキンシップが増えた。
- ②-15 夫と共に学んだことを共に実践することで、息を合わせて育児がしやすくなった。
- ②-16 夫はセミナーに参加できなかったが、回を増すごとに内容に興味を持ってきた。
- ②-17 学んだことを夫に伝えて共有することで、夫も子育てに向き合ってくれた。
- ②-18 夫も一緒に参加していたので「このときは、こうだったね」と子育ての会話が増えた。
- ②-19 夫は子育てに興味はなかったが、参加して知識を共有し子育てを手伝うようになった。
- ②-20 今はこういう時期だからと夫婦で話しながら、一緒に家族で成長していく感覚を持てるようになった。

◆考察

ここでの質問は、受講期間である8か月のあいだに、子育てにおいて、または、家庭生活においてどのような変化を実感しているかを尋ねている。

まず、「子育てに対するイメージや認識が変化した」ことを示す記述がいくつか見られる（②-3、②-4、②-10、②-11、②-12）。受講によって、育児が大変から楽しいに変わった、育児に余裕ができた、育児を楽しめるようになった、安心して育児ができるようになった、（育児を）不安に思うことが減った、といずれも肯定的な変化を実感している。

次に、「子どもへの対応・接し方の変化」を示す記述がいくつか見られる（②-1、②-2、②-5、②-13、②-14）。②-1や②-13にあるように、受講を通して得た知識等により、何にでも手を出すという状態・情報過多による焦った状態から、子どもを見守る・余裕をもって接することができるようになる、②-2、②-5、②-14にあるように、子どもの行動の意味を考えながら見守る態度が身につく、子どもを第一に考えるようになってふれあいが増える、新たに知った遊び方・接し方を応用してスキンシップを増や

すなど、望ましい変化が読み取れる。

さらに、妻の記述のみに限定されるが、「育児に対する夫の関心やかかわりの高まり」を示す記述が見られる(②-16、②-17、②-19)。これらのうち、②-16と②-17は、講座には参加していない夫でも、妻が講座の内容を家庭で伝えることで、育児に興味を持ったり・育児に向き合う姿勢を高めたりしている。また、②-19では、育児に関心のなかった夫が育児に参加するという変化が示されている。

これとは逆に、夫の記述に限定されるが、「妻への気遣い・気づき」が増えたとする記述(②-7、②-8)が見られる。具体的には、仕事中でも育児負担を案ずるようになった、セミナーでの妻の積極性への気づきなどである。

こうした、妻の認識する夫の変化や夫から妻への関心の高まりが(育児をめぐる)夫婦関係のあり方にむすびついていくと期待されるが、実際に「夫婦関係の望ましい変化やそれによるポジティブな効果」に相当する記述(②-9、②-15、②-18、②-20)が見られている。すなわち、育児を夫婦仲良く楽しむ、共に学んだことを共に実践して育児がしやすくなる、講座の内容を思いだし夫婦の会話が增える、夫婦(子ども)が家族として一緒に成長していることを実感するなどである。

質問①「セミナーの印象」の記述において見られた性差、すなわち、育児にかかわる女性の当事者性の高さ・男性の当事者性の低さは、この質問②「受講による育児や家庭生活の変化」では明瞭にみられず、むしろ、この親講座を受講することを通して、男性も女性も同じように、育児イメージの変容(認識レベル)、子どもへの接し方の変容(行動レベル)、パートナーへの関心の高まりを感じており、それらが育児をめぐる望ましい夫婦関係につながっていると読み取ることができる。

③子育てに関して後輩パパ・後輩ママに伝えたいこと

◆父親の記述

③-1 子どもと多く接する時間を持つこと。

③-2 セミナー参加することを薦めている。

◆母親の記述

③-3 育児は大変だということを聞くと思うが、楽しみながらできるということを伝えたい。

③-4 子どもが動き始めると行動に驚くことも多いが、子どもの目線で行動の意味を発見すると楽しい。

③-5 相手の立場に立つということを親が実践すると、子どもも相手に思いやりを持てるようになるのではないと思う。お互いに頑張ろう。

③-6 子どもを通して親は世界を知ることができる。親が学べる機会を子どもが作ってくれているのだと感謝の念を持つことで、素直に子どもに愛情を注ぐことができる。

③-7 あまりいろいろなことに悩みすぎず、楽しく子育てができたらいと思う。

③-8 子どもの好奇心を大切に、やりたいことをやらせてあげればいい。

③-9 親も一緒に成長していくつもりで、肩の力を抜いて楽しみながらできればいい。

③-10 親の思い通りにしなければと考えるより、赤ちゃんはこ

んなもんだと思って力を抜いて。

③-11 育児書は参考程度で、子どもをしっかり見て、その子に合うかどうかを自分で考えて。

③-12 同じ年のよその子と比べたりせず、それぞれ個人差があるので、温かく成長を見守って。

◆考察

まず気づくのは性差である。回収数に男女の差があり、男性の回答が少なく、見られた記述は2つしかない(③-1、③-2)。それらは、子どもと多く接する、セミナーを他者に薦めるである。本講座を他の親に推奨してくれることは、実践者側にとってありがたいことではあるが、これら2つの記述は、女性が記述した後輩ババママへのアドバイスと比べると平板な感がぬぐえない。ここにも、育児に対する男性の当事者性の低さ・女性の当事者性の高さを垣間見ることができよう。

母親の記述を見てみるとは、それらは大きく3つに分類できる。1つめは、育児を「楽しむ・力を抜く」である(③-3、③-7、③-9、③-10)。これらは、完璧な育児をしようとは考えず、子どもを思い通りにコントロールしようとはせず、肩の力を抜いて育児を楽しむ姿勢をもつようにといった助言である。

2つめは、「子どもの立場から育児を考える」である(③-4、③-8、③-11、③-12)。子どもの立場になってその行動を解釈してみる、好奇心にもとづく子どもの行動を大切にする、情報に振り回されず目の前の子どもにしっかり向き合う、他の子と比べずわが子の個性を温かく見守るようにといった助言である。

3つめは、「育児の相互性の重要性」である(③-5、③-6)。親が子どもに思いやりを持って接すると子どもも思いやりをもてる(→だから思いやりをもった働きかけが重要である)、子どもを通して親は学んでいける・成長できることに気づけば、子どもに愛情をもって接することができるといった助言である。

以上から、この講座を通して、自分の育児能力を無理に高めようと焦ったり、育児への熱意が足りないのではないかと悩んだりせず、成長・発達していこうとする子どもの気持ちやそのペースをじっくり見守り、子どもに愛情と優しさを注ぎながら、子どもと一緒に過ごす時間や互いを高め合う喜びを楽しむことの重要性を、母親たちが学んだと考えられる。

4. ひろばにおける早期ペアレントリング長期講座の意義

育児支援ないしは家庭教育支援という目的で実施される親講座(ペアレントリング講座)には、学齢期・学童期の子どもを持つ親を対象としたものは少なく、その多くは乳幼児の親を対象としたものだ(倉石 2013)と言われている。

こうした一般の乳幼児の親を対象としたペアレントリング講座のうち、わが国で広く実施されている代表的なプログラムに「ノーバディーズ・パーフェクト」がある。この講座は、乳児～5歳までの子どもを持つ親を対象とし、必ず託児サービスを準備した上で、主な目的を受講者どうしの連帯を高めながら育児に前向きになることを促すことにおいているため、本講座のように、0歳代(5か月から1歳まで)という時期を限定した上で、子どもの成長・発達に沿ったカリキュラム構成にはなっていない。また、この「ノーバディーズ・パーフェクト」は1クールが6回～10回

と幅があるものの、毎週1回が原則であり、受講期間は長くても2か月半程度である。この点も、本講座の月1回・全7回・8か月間とは異なっている。

これ以外にも、コモンセンス（毎週1回、全10回、約3か月間 対象は1歳～小学4年生の子どもの親）、スターペアレンティング（毎週1回、全2回、半月間 対象は0歳～12歳までの子どもの親）などがあるが、いずれも基本的に毎週受講するものの、半年以上継続するわけではないし、対象年齢の幅がかなり広いため、親として子どもに向き合うための基本的な態度・構えを自分たちで導き出すようなカリキュラムになっている。

本講座と同様、0歳児とその親を対象としている講座に着目すると、例えば、芝野松次郎氏が主宰する「赤ちゃん講座（0歳児講座）」がある。これは、神戸市総合児童センターが開設された1987年以降現在まで継続して開催されている「母と子のふれあい講座（現在は、親と子のふれあい講座）」に含まれる4種の講座のうちの1つであるが、これも2か月間（毎週1回、計8回）のプログラムである（芝野 2010）。また、原田正文氏が近年開発した「親子の絆づくりプログラム赤ちゃんがきた！（BPプログラム）」は、2か月～5か月の子どもの親が受講することを推奨しており、仲間づくりと親子のアタッチメント形成を主眼においた1か月間（毎週1回、計4回）のプログラムである（NPO法人こころの子育てインターネット関西 2013）。

以上のように、乳幼児～小学生の親あるいは0歳児とその親を対象とした親講座のほとんどが、母親参加を前提としており、さらに毎週1回で2～3セッションから8～10セッションで構成されている。したがって、夫婦参加を促しながら、8か月（月1回、全7セッション）という長期にわたって、子どもの成長・発達に合わせてカリキュラムを組み、時間をかけて焦らずゆっくりと男女ともが親として成熟していく過程を支援するというプログラムはきわめて特異である。

では、こうした本講座の特色が、実際に、受講者からのどのように評価され、受講の効果として表れているであろうか。これについて、「夫婦の参加」「0歳児対象」「子どもの成長・発達に沿った内容」「長期間プログラム」という本親講座の4つの特徴に沿って検討していく。

「夫婦の参加」という形式を採用したことの効果は、質問②「子育てや家庭生活での変化」への回答に如実に表れている。ここでは、男女ともに（質問①および質問③への回答には性差が見られましたが）、認識レベルにおいても行動レベルにおいても自らの変容を実感しており、それがパートナーへの関心の高まりと相俟って、育児をめぐる望ましい夫婦関係につながっていた。回答の内容には、男性は受講していないが「家庭で妻が夫に講座内容を伝える」「夫が講座内容に関心を徐々に高めていく」などが見られ、パパママセミナーと命名し、出来る限り夫婦で参加してほしいと家庭に働きかけることによって、家庭における育児への男女共同参画が自発的に促進されている姿が確認できる。

「0歳児対象」であることによってもたらされる効果は、受講者の記述から特に明瞭に取り出すことはできなかった。育児の不安・孤立・悩みから生じるストレスや疲労感が蓄積しない早期のうちから、親講座を通して自らの育児に自信や意欲をもって立ち

向かうことのほうが、すでにストレスや疲労感が蓄積している可能性の高い時期（子どもの年齢が高くなって）からよりも効果があると予測できる。しかし、1歳以上の子を持つ親との比較等がカリキュラムに入っているわけでもなく、受講者たちは、0歳という早期から受講していることのメリットを実感できなかったと考えられる。

「子どもの成長・発達に沿った内容」を学ぶことは、子どもの発達や行動に対する理解やそれに基づく接し方に影響を与えると考えられる。実際に、質問①の回答において、子どもの成長や変化に対する関心・認識・気づきが促された点、乳児の理解の深まりがポジティブな結果に結びついている点、質問②の回答において、子どもへの対応・接し方が変化している点、質問③の回答において、子どもの立場から育児を考えることを後輩への助言としている点など、いずれも子どもの発達の変化・行動の理解と子どもへの接し方に該当しており、一定の効果が見られていると判断できよう。

「（セッションの間隔は空いているが）長期間プログラム」が設定可能なのは、大学が附属機関であるサテライトの中で地域子育て支援拠点事業・ひろば型を運営しているからである。長期間であることは、受講者である親が育児を長いスパンで捉えられるようになったり自らの成長を実感できたりすることにつながるはずである。実際、質問①において、育児に対して安心・ゆとり、あるいは見通し・余裕を持てるようになった点、質問③への回答において、育児を楽しむ・力を抜く、子どもの立場から育児を考える、育児の相互性の重要性などを後輩への助言としている点は、受講内容を家庭において実践しながら、その手応えを確認・実感していくという長期の過程を経なくては記述することのできない内容であると考えられる。

以上の考察を統合すると、大学サテライト（地域子育て支援拠点・ひろば型）における長期にわたる早期からのペアレンティング講座「0歳児のパパママセミナー」の意義は、以下のように整理できる。

- ・「パパママセミナー」と名づけ、極力夫婦で受講することを勧めることで、育児にかかわる夫婦間の関係性は良好な状態になる。言い換えれば、男女共同参画社会につながる家庭状況をつくることに貢献する可能性が高い。
- ・「子どもの成長・発達に沿った内容」をカリキュラムに導入しておくことで、受講者の子どもの発達の変化・行動の理解が進み、それに基づいた自分なりのわが子への接し方を身につけることが可能となる。
- ・「8か月という長期間」のプログラムによって、育児に対して安心・ゆとり、あるいは見通し・余裕を持てる、育児を楽しむ・力を抜く、子どもの立場から育児を考える、育児の相互性の重要性に気づくなどによって、受講者である親は育児を長いスパンで捉えることや自らの成長を実感することが可能となる。

今回の報告では、「0歳児」であることの特色を取り出すことができなかった。1歳児以上の子を持つ親を対象とした夫婦対象のセミナーを大学サテライトで実施し、その受講者による評価結

果と今回の「0歳児のパパママセミナー」受講者による評価結果とを比較する方法によって、「早期から講座を受講することの意義」を明らかにすることが今後の筆者らの課題である。

謝辞

本講座の受講家庭を募集するに当たりご協力いただいた神戸市灘区保健福祉部の皆様に感謝申し上げます。また、本講座に参加いただき、小・中・高校生とのふれあいにもご協力いただき、アンケート調査にもご協力いただいた受講家庭の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 原田正文（2006）子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポート
にみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会
兵庫県ホームページ（2012年8月更新）地域子育て支援拠点事業 http://web.pref.hyogo.lg.jp/hw10/hw10_000000060.html
NPO法人こころの子育てインターネット関西ホームページ
（2013） <http://www.kosodatekki.com/bp.php>
国立社会保障・人口問題研究所（2011）第14回出生動向基本調査結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要
<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.pdf>
倉石哲也（2013）学齢期の子育て支援－PECCCK講座の開発・実践・効果－ どりむ社
内閣府（2011）平成23年版 子ども・子育て白書 勝美印刷株式会社
縄田康光（2008）戦後日本の人口移動と経済成長 経済のプリズム（参議院調査室資料）No.54, 20-37
芝野松次郎（2010）行動療法しつけ指導事業 育ちゆく子ども－療育指導事業（発達クリニック）の実践と研究Ⅶ－ 神戸市総合児童センター 49-63
山崎亮（2012）コミュニティデザインの時代－自分たちで「まち」をつくる－ 中公新書 2180 中央公論新社